

浄土

1984-10

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 澤島省 (特別授承認雜誌) 第三二五号
昭和五十九年九月二十五日印刷 昭和五十九年十月一日発行
第五十卷
十月号



甲子秋
持
林



昭和60年度版

浄 土 宝 暦

予約発売開始!!

ふるってのお申込みを!!

◎法然上人鑽仰会が責任をもって編集している「浄土宝暦」。
昭和60年度版がまもなく刷了となります。年末年始の好便
な檀信徒用施本として、広くおすすめいたします。

B 6 判 総ページ数 40ページ

1 部単価 65円 (200 プ以上 60円)

送料実費 (300 プ以上はサービスします)

●なお、ご寺院名の印刷なども実費にておこないますのであ
らかじめご連絡下さい。

できうるかぎりの便宜もおはからいいたしますので、多くの
方々からのご注文をお願いいたします。

..... お申込み

〒 102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

法 然 上 人 鑽 仰 会

(振替) 東京 8-82187



無量寿仏の光明顯赫にして、十方を照耀す。諸仏の国土に聞こえざることなし。

——『無量寿経』光明歎徳章

目次

法 話

お十夜のころ……………水 野 善 朝……(2)

お十夜を迎える(上)……………遠 田 弘 俊……(7)

浄土宗のハワイ開教(二)……………新 保 義 道 ……(22)

金光上人と頭塚物語……………佐 藤 堅 瑞……(13)

《世相評談》

古都保存協力税で対立の京都……………高 橋 良 和……(14)

『立ち止まるな善導』を読む

期待・希望……………渡 辺 杜 水……(18)

エッセイ 娘の愛車「ウサコ」……………木 下 隆 一……(29)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第4回……………寺 内 大 吉……(35)

前章・絶唱の経典 (四)……………挿絵 松濤 達文

浄土句集……………一 田 牛 畝 選……(20)

表紙 小林治郎 画

カトッ 大正大学美術部

(法)

(話)

お十夜のころ



わたしのところは信州善光寺の裏山にあつて、りんごの産地としても知られています。お十夜のころともなると、赤く熟した果実が枝もたわわに実り、道行く人々の味覚をそそります。とくにお十夜を目ざしての善光寺参

みずの
水野 善朝
ぜん ちょう

(長野市往生寺住職)

りの旅人にとっては、悟好のお土産となります。

長野の街の中央通りを北にむかって進むと、善光寺の参道になっている石畳の道に達します。その入口の位置に「十夜会」と墨書

きした高札が立ち、道を横断するようにいくつもの提灯が揚げられ、人々はその下をくぐるような形で参道を登る。浄土宗の大本山善光寺大本願の十夜会の行われていることを示しているのです。わたしはこの提灯を目にする度ごとに、なにかしら安堵感をいつも覚えます。それはまた、今年もお十夜を迎えることができたという喜びにも通ずるもののように思われてきます。

方々に 十夜の内の かねの音 芭蕉

「奥の細道」や「野ざらし紀行」などの名紀行文も遺した江戸時代の代表的俳人松尾芭蕉（一六四四—一六九四）の句。鉦をつるして念仏をとえながら叩く。それも一つにかぎらず、いくつも並べて一斉に叩く。そうした音が、あちらのお寺、こちらのお寺からと家並や林を越えてひびきわたってくる。京都の街のお十夜のさかなな様子が、ほうふつとさ

れるような句です。

前帯に 女房更行 十夜哉 松村月溪

この作者松村月溪（一七五二—一八一）は尾張（愛知県）の人で、二十歳のころ京にのぼり蕪村に師事して俳画を学んだ。師を失ってからは円山応挙の門に入り、のちに新しい画風を起して四条派の祖となった。京都の東洞院四条に住んでいたことからそう称せられたのであろう。

前帯というのは女性が帯を前で結ぶことをいい、江戸時代の年増の女の姿が想像されます。大勢の善男善女が群がるようにして念仏をとえながら、時のたつのも忘れている。だんだんと夜がふけていく。そういう中に一人の年増女の前帯姿があったのです。お念仏の中にあって、しかも女の姿をとらえるのは、いかにも画家らしい着眼ですが、別な角度からみれば、念仏をとえなくてもなお異

性に目をうばわれる男の性を率直に指摘している句とも受けとれます。

十夜かな 余程寄りかと 母は聞き

これは誹風柳多留のなかにおさめられている川柳の一つです。ここでいう十夜とは、その行事の代表格である鎌倉の光明寺のことを指しています。光明寺八世観誓祐崇上人に初まる引声念仏の十夜として有名になったものです。

母親が光明寺のお十夜にお参りにきています。熱心な念仏信者の母親は、ことによるとおこもりまでして、家に戻らない日もあったのかもしれない。そこへ、嫁いだ娘が夫との縁を切ろうと思いつめて、母親に相談にきました。鎌倉の松が岡という地に、東慶寺という縁切り寺があります。駆け込み寺とも俗称されているように、この寺に駆けこんで三年間有髪の尼ですごせば、離縁が認められた

というところ。母親が娘に、その縁切り寺はこの光明寺さんからそれほど遠くないところにあるのかね、と聞いている意味です。

江戸時代には、一度結婚したが最後、離婚は不可能に仕組まれた時代でしたから、駆け込み寺の果す救いの役割りは大きかったようです。川柳の中に、お十夜が離縁を願う切ない娘と母との会話と結びついて語られていることに、江戸時代の庶民の悲しい姿が浮き彫りにされている気がします。

江戸時代の笑話を集めたものの一つに、「輕口露がはなし」というのがありますが、その巻の五に「十夜の長談義」という話があります。

関東よりのぼりたる長老、寺へすはりて
(住職となって) 始て十夜の談義をとかれけ

る。洛中（京都の町）の男女参詣群集せり。長老高座にて申さるは、「昨晚談じたる次を、今ばんも講尺いたす事也。それに付、うけ給はれば、愚僧が談義は長かくて退屈など、女中（ご婦人）方の申さるると評判なり。理句義のよく詰まるやうに（お経の文句や教えの意味がよくわかるやうに）と存て申也。さりながら、今晚のも何れも次第に（みなさんのお好きなやうに）いたそふが、女中たち、何と思しめすぞ。みぢかひがよいか、長がよいか」と、くりかへし問はれける。参詣の男女返事なく、くつくつとわらひける（短かいのがよいか長いのがよいかと言ったので、陰茎を連想して笑った）を、長老腹立せられ、高声に、「それはかたがたの気のやりやう（氣のまわしよう）がわるひ」といわれた。

これとほとんど同じ話しが、やはり江戸笑話集の一種である「きのふはけふの物語」の

中にあります。このほうは、彼岸の最終日の話しになっており、談義の僧は貞安という名前が明記されています。貞安という僧は、安土宗論で知られる日蓮宗との法論に勝って名をあげ、信長、秀吉、家康から尊敬と信望を得たばかりでなく、朝廷にも招かれて法を説くことしばしばあり、民衆からも慕われた浄土宗高僧の一人です。

お十夜については、このほか近松門左衛門の「心中天の網島」の中にも触れられていますし、江戸時代のいろいろな文獻に登場します。それだけお十夜が盛んであって、庶民の生活と密接なかわり合いをもっていたことがわかります。

今日でもお十夜の法会は、浄土宗の寺院で続けられています。本来は陰暦十月五日の夜から十五日の朝までの十夜にわたる法会でし

たが、今では一般寺院では一日か三日ですま
せています。善光寺大本願では現在でも十日
間にわたって行われ、夜のお説教も続けられ
ています。

お十夜の起源を語るものに、真如堂縁起が
あります。今から約五百五十年ほど昔、足利
時代の西暦一四三〇年代のころ、伊勢守貞国
が真如堂に三日三夜参籠して出家を誓ったと
ころ、夢に高僧があらわれて通世を三日待て
という。三日後家督が決り、舞いこんだ幸運
を感謝し、続いて七日七夜の念仏を修したと
いいます。

お十夜の根拠は、無量寿経の下巻に「この
(世)において善を修すること、十日十夜すれ
ば、他方の諸仏の国土において善をなすこと
千歳するに勝れたり」という文にあるとされ
ています。

このごろは、一日だけで十夜会をすませて
しまうお寺のほうが多いのではないでしょう
か。一日だけではお念仏の功德が積めないの

ではないかと心配されるむきが、おありかと思
いますが、そこはご安心ください。無量寿経
の文を注意して拝読しますと、十日十夜の文
の数行前に、次のように書かれています。

「心を正し意を正しくして、斎戒清浄なる
こと、一日一夜すれば、無量寿国に在りて
善をなすこと百歳するに勝れたり」

一日とか十日とか日数にこだわることなく
全身全霊をかたむけて、お念仏の行にはげむ
ことが第一だと思えます。

お十夜には収穫祭の意味もこめられていま
す。牡丹餅をお供えしたり、秋の実りの作物
をお供えして、感謝の祈りを捧げることがで
きる幸せを、つくづくと味わいたいものと思
います。

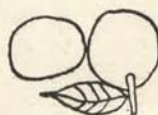
秋の夜長の静かな暗闇を流れて、遠く近く
ひびく鉦の音、しばし人の魂を洗い打つひび
き、今年も人々の耳に届くことを祈って止み
ません。

(法)

(話)

お十夜を迎える(上)

仏、無量寿經に説いて曰く、「此の土地に於いて善を修むること十日十夜すれば他方諸仏の国土に於いて善を為すこと千歳するに勝れたり」と。緒而今回はお十夜について暫時お話を進めたいと存じます。只今申し上げましたお言葉は、どなたも必ずお十夜会になるとお聴きになる經文であります。今更に申すまでもなく十夜法要と言えば、私達浄土宗を信仰するものにとりましては、非常に親しい法要であり、聞き慣れた行事であると申すことが出来ます。特に此の時期から申せば、十



遠と田だ弘こう俊しゅん

(東京・文京区慈眼院住職)

月半ば暑からず、寒からず、まことに心に沁みる頃であります。

十夜法要の起源に就いては、既に浄土宗の御信者の皆様には充分御理解なされていることとでありましょう。後程にお話することとして、先づ前掲の經文について申し述べたいと存じます。それに先き立ち私達が常に誦誦致します浄土三部經とは、一、無量寿經上下二卷、二、觀無量寿經、三、阿弥陀經であることは申すまでもありません。特に先きの經文は、無量寿經の下巻にお示し下されている

ものであります。今此の経文の依つて來たる所の前文を拝読致します時、經の中の五惡段と申して、まことに身の毛のよだつと申しましようか、ただ恐懼の他なき次第です。私達は何角平素読みますお経では、吾が身にとつて都合の好い処は声を大にして称え、身に迫るところは小走りに通ろうとする氣配が無いとは申されぬのであります。今此の五惡段に説かれている心を反省しながら暫時お話を進めさせて頂きたいと存じます。

仏が先づ第一に、此の世の中に住するものは五つの惡業に苦しむことから説き進められ、此の五惡の爲に、現生での五つの苦しみを受け、來世では同じく五つの果報の中に転生するであらう。それは耐えることの出来ない苦しみなのである。何としても此の苦しみの中から救つてやらねば仏としての道を得たとは言えぬのである。何が五つの惡であり、五つの苦しみなのだらうか。

第一の惡とは、強き者が弱き者を殺し、生

きとし生きる者総べてが殺し合いの中に生息していると言つても過言ではない。他を殺さずして自らが生きることが、此の世では望んで得られぬ婆でありましよう。然し罪を犯して、その報が無いということはあり得ないことであり、必ずその苦果を受けなければならぬ、やがて此の世の生が終つても永劫にその苦の中に浮沈しなければならぬのだ、と。これを知りこれを悟つて、その罪から脱するならば必ず福德無量となるであらう、と。

第二惡とは、人間はまことに勝手氣配で他人のこころを察せず、信を失つて、互に相手を陥し入れて己れの利益だけを計ろうとして争ひ絶えることがないのだ。やがてその果報は、三塗（地獄・餓鬼・畜生）無量の苦しみを味ふこととなる。速やかに此のことから解脱して身心共に清涼となるよう努めよ、と。

第三惡とは、昔からの諺に英雄は色を好むと申しますが、女性を追つて戦いを記し、或いは自らの家庭を省みず、國を亡ぼし、家を

滅ぼしたる類は数え切れない程である。こうしたことから速く脱して、快樂安穩の境地に到達することが肝要である、と。

第四惡とは、当然のことながら進んで善きことを為そうとせず、彼れ是れと理屈をつけては己れの爲した惡に自覺せず、善人を見ては、嫉み憎み、賢者に対してはこれを謗りけなして快哉を叫ぶといった有様、これ等のことを憶う時、まことに人の心は浅間しく、薄情極らないことでありましよう。これを速やかに反省して、眞実の道に入るべきであらう、と。

第五惡とは、子の親に対してどうか。果して孝養の心を以て接しているであらうか。毎日の生活は怠け放題で、少しも努め働こうとせず、時には父母に対して反抗し、酒に耽り、定職に就かず、親族知己、先輩に対して一つの善を行うことをせず、かえってこうした善者を見ては憎み腹立て、時には殺意まで持つと言ひ恐るべき心の持ち主となる。こ

の様な状態だから、親族知己の中には、こんな人間は早く死んで呉れるならばと願う心さえ起るようになるであらう。こうしたことが重なって、愈々自分の命が終ろうとする時、後悔しても一生に作った惡業は、及ばぬこととなるのであります。天地の道理は將に鏡にかけて見るようなものであり、速くこのことに気づくならば、まことに貴いことと言ふべきであります。然し惡に染みたる者は惡から惡に入つて遂に三塗（地獄・餓鬼・畜生）の苦の中に陥入るより他にはないのであります。恐るべし、懼るべし、と。六道に輪廻する姿を説き明されて、此の五惡の段を、ことこまかに示されているのです。今靜かに此の五惡の段に説かれたる教法を拝する時、全く返えず言葉がないであります。お釈迦様が二千五百年以前に、既に現在の世相人心の荒廃をまさまざと示されていることを痛感すると共に、いかに人の心は度し難いものであるかを思わずにはいられません。

私は無量寿經の五惡段に示された數々を拝讀して、人の道、五常の道理を詳さに聞いて、此のことが即ち仏の道であり菩薩道だと思ふのであります。特に五戒は、殺さず、盗まず、淫らな行爲をせず、嘘妄を言わず、酒に依つて乱れず、これに加うるに、五常の道、仁、義、礼、智、信、は当然人の行ふ大切な行爲であることは、今更に申すまでもないことでありましょう。

ところで爰に一つの難関に逢着致します。私自身のこと申せば恥しいことながら、或る席のことでした。集つた人々は至極まじめな信仰に生きる方々ばかりの話の中に「遠田さん、ほんとうに有難いお話を頂いて、泌みじみと感じました。然し、私達は兎角立て前と本音といひますか、立て前では当然そうであるべきであるがと理解しますけれど、愈々本音となると、どうしてもそれに添って行けないことが多いのではないしょうか、判つちやいるけれど、止められない、と言つたこと

ですネ」と指摘されたは、全く二の句が告げられない程のショックを受けたことがありました。そうした例が枚挙に遑がないと申すべきでしょう。

私達は毎日經文を読み、經の意味するところを充分知らされている筈なのに、そのことを体得することがいかに難中の難であるかを痛感せずにはいられないのです。

前述の五惡段に説かれている全文を拝讀しても、どの一節をも吾が身に照して御尤もだと思ふことのみでありましょう。而もそのことが今の世の姿に一々照合しても、余りにも生々しく、身辺に迫る思いであります。全く此の世の五惡勤苦することかくの如しと仰せられ、五痛、五惡がめぐりめぐって、苦しみから苦しみへと、逃れようとして逃れ得ず、安穩を求めて得られず、三惡趣の苦の中に煩悶の日々を送ることとなるは必然の帰結と言はねばなりません。

此の有様を仏は常に大悲心を以て善に就か

しめようと、御共勞なされているのです。仏は衆生を導くに大方便を以てし、威神力を以て総べての惡を摧破して、安穩快樂に入らしめようとなされているのであります。

偕而ここで再び冒頭に掲げた經文が蘇返つて参りました。「汝等ここに於いて広く徳本を植えよ、正心正意にして齋戒清淨なること一日一夜すれば、無量寿國に在りて善を為すこと百歳するに勝れたり。ゆえはいかに、彼の仏の國土は無量自然にしてみな衆善を積みて毛髮の惡なく此處に於いて善を修むること十日十夜すれば他方諸仏の國土に於いて善を為すこと千歳するに勝れたり。ゆえはいかに、他方の仏國は善を為すものは多く、惡を為すものは少し、福德自然にして造惡なき地なり」と、懇うにお説き下されてあります。私達が此の世に生を亨けて、生れつきのままの所謂本能的性を恣のままに駆使するならば、全く五惡段そのままの姿と言わねばなりません。經文は最大の言葉を以て、劇しく因果を

明し下され、拝するだに恐れおののくばかりであります。此の事の現實を直視する時、厭離穢土、欣求淨土の心が自ら発露することであり、改めて弥陀大悲の本願不思議を思わずにはいられないのであります。

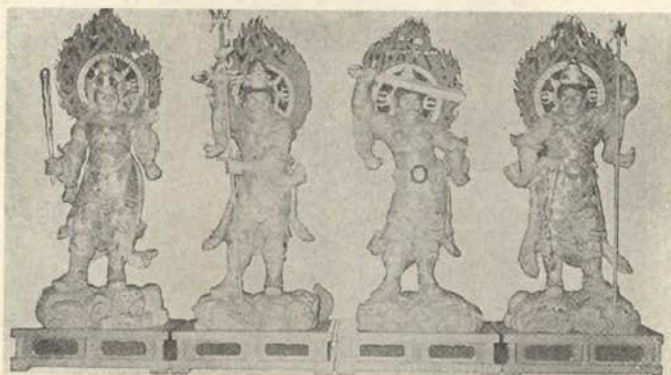
信仰とは一言にして「恐懼」を知ることだと申されます。それは自らの心に懷く惡に對して恐れることであり、それを大いなる光の前に照して、懺悔の心を発することが信仰生活の最大の目的であり、その果報として得られるものが仏果であると言えらると思ふのであります。善導大師の御一生を拝しましても、そのお遺し下された御法語には総べて罪の意識からお説きなされたものがいかに多いかを知る時、自らの反省の上に、願う心は淨土への一步一步でなくてはならぬことであります。愈々十夜の法要を迎えて静かに来し方、行く末を憶うこと切なるものがあります。

洪柿を眺めて通る十夜かな

木彫像

—四天王像—

。。。格調高い品性豊かな尊像。。。



多聞天
(北)

増長天
(南)

持国天
(東)

広目天
(西)

材 質 楠材・檜材

サイズ 総高さ2尺(生地仕上手彫) 4体一組 48万円

サイズ 総高さ3尺(生地仕上手彫) 4体一組 75万円

◎彩色仕上も承ります。

▶ご一報下さればご相談に応じます。

有限会社 源 田

〒990 山形市相生町 TEL.(0236)22-2364

金光上人と頭塚物語

佐藤 堅瑞
（青森教区教区長）

法然上人の高弟金光上人は、奥州津軽で念仏を一生懸命に弘められておりました。そして浪岡の北中野に庵をかまえて人々を濟度しておりました。

その頃、浪岡城の下に大きな池があり、池の中には大蛇が住んでいて、色々な悪いことをして人々を苦しめていました。

金光上人は、村人の難儀をなんとか救いたいと思い、或る日、村人達とその大蛇の住む池に行き、南無阿彌陀仏の御名号の御札を大蛇の住む大池に高声念仏とともに投げこみました。

するとその夜のことです。金光上人の庵の戸を静かにたたく音がしました。上人は不思議に思いながら戸をあけてみますと、そこには若い女の人が立っておりまして。「どなたさまでございましょう」と、上人が尋ねられますと、その女の人は、「私は大池に住む大蛇です。上人さまの南無阿彌陀仏の功德により、今までの悪業をすっかり懺悔して生れ変わることが出来ました。私の前の大蛇の身体は五本松にあります」といって、いずこともなく姿を消してしまいました。

金光上人は不思議に思い、朝になるのをまって、村人達と一緒に五本松に行ってみました。するとそこには、大蛇の死体は二丈以上もあり、その頭の上には、上人の与えた南無阿彌陀仏の御札がのっていました。

村人達は今更ながらお念仏の功德の偉大なことに驚いたというのであります。

この大蛇の頭を埋めた場所を頭塚こづつかと言い、今なお人々の語り草となっております。

金光上人の東北における教化の物語りは、この外たくさんありますので、当時の人々は上人を、「観音様の化身」とあがめたということです。

《世相評談》

古都保存協力税で対立の京都

京都は観光の都であるということは、立ちなれば社寺のことごとくが、古刹であり、名刹である。その上数多くの文化財が、保存されているのは、全国の各地域の比ではない。

その京都の宝として寺院、一部に神社もふくまれているが、兎も角も二カ年越に紛及しているのは、古都保存協力税という新税である。

それはこの税が、目新しいように思われているが、これはすでに十数年前に市当局と仏



高橋良和
たかしりょうわ

教寺院側とが、長い間対立して争った文化観光税と名のつく京都の税金である。

これは京都市が、入洛して社寺を観光する人々に対して一人五十円の税の負担を求めて一部は古文化財の保存のための助成という名目で、市の財政の増収を考えようということで、このとき仏教側とものすごい抗争がなされ、結局するところ社寺側が、口説きおとされていやいや納得したということで、この観光税は、十年間の時限税という期限つきで実

施され、社寺が、徴税者とならざるを得なくな
って、まざまざとその弱さをみたのであった。

このことが、すぐ隣県の奈良県へも波及し
て同県でもこの税金の実施に踏みきり、大仏
さまの東大寺が、真正面に立って奈良県庁と
抗争した記憶がある。しかしここでも泣く子
と地頭には勝てぬという諺の通り東大寺も遂
にうんというより仕方がなく、先に頭を下げ
た法隆寺やらの観光寺院ともども、右にな
らえということになったことを覚えている。

さて今度の古都保存協力税について紹介す
るが、京都市の今川正彦市長は、五党相乗
りの市長である。前市長の船橋求記市長が、急
逝したので急ぎ市長に推されて当選したので
あるから、四方八方にいい顔をみせなければ
ならない点では、まことに気の毒な存在であ
る。この新税は、市議会においては、共産党
を除く四党の市会議員が賛成しているのであ
るが、仏教会側が願いとにするのが、共産党
である党では、多少批判が残る。しかしこれ

もやむ得ないことであろう。

そこで猛反対運動を起こしているのは観光
の社寺である。

新税の対象となっているのは、年間二万人
の入場者がある三十六カ寺、二神社、二施設
で、小、中学生を除く参拝者に課することに
なっている。

市はこの社寺との新税の施行に、かなり時
日をかけて接渉していたが、社寺側のなかに
はほんのわずか脱落したところもあるものの、
二十一カ寺は、結束して立ちあがり訟訴をや
っている。

京都市側は、市議会で可決したのであるか
ら、いよいよ実施にすむことになり、京都
府知事に申請して自治大臣宛に許可の申請が
出されるところまできている。

問題は京都府知事の考え方であるが、社寺
側と了解をつけた上でこの税の申請をしたい
からという知事の談話を発表しているが、お
そらく社寺側は、うんとは言わないであろう。

そうすると自治大臣は、どうするのか、問題はくるところまで来たという感じである。

そこで一つ引かかる点がある。

それは前回の文化観光税が、時限税であるということから、十年間にわたる税の施行が終ったときに、時の京都市長の高山義三市長から、千七カ寺の社寺に対して、この文化観光税は、十年間の時限税であるから、今日如何なる場合でも、このような税は施行しないという約束が、はっきり交わされていることである。

それが果たして生きているのか。少なくとも公人の市長が、社寺と約束しているのであるから、それを反古にするということは、代が替っても市長は、市長である。はっきり交わされた公正証書が残っている点で、社寺側という根拠もあるといえる。

それに昨年は、市長の選挙がある。それを考えてのこの税の新設であると社寺側はみている。仏教会の松本大円理事長（清水寺北法相

宗管長）は、

現状で理事長の許可はあり得ない。市は今後もあらゆる方法で、寺院の切りくずしにかかるだろう。市長選の行われる来年まで持ちこたえれば勝利がある。

と主張している。

もう一つ言えることは、もしも自治大臣の許可があったとしても、該当の社寺は、徴税の事務は行わないと主張している。

しかしまた法の立場からすると、もし拒否する寺院があった場合には、税の公平を保つために、算定した税額を差し押えるか、地方税法の三年以下の懲役、五十万円以下の罰金という規則が適用される。

そうやってきた場合には、社寺はどうなるのか。年間四十万人の観光者がやってくる京都、但し税をおさめるのはそれらの人々で、社寺はその事務をとるだけで、腹が痛くない

とも思われるが、今後の市当局との攻防は、判断がつかないと思う。

そしてこれが、だんだんエスカレートしてくると、政治問題になる可能性がある。

但しこの税は、一年間の徴収金額は、十億円とある。大京都市としては、わずかな収入であるから、目くじらたてて仏教の寺々をいじめることもいらないと思うが、商工業都市でない京都であるだけに、一ばん弱いものにこの税を課すということになりそう。

清水寺あたりの門前の土産物店などは、団結して反対しているし、東北新幹線の開通で、観光者の入浴が、少なくなってきた京都市からすると、さらにその上観光税を取りたてると、入浴者が減少するということで、旅館の一部でも反対しているらしい。

しかし問題は、これからであろう。

京都の社寺は、こうした市のやり方に抗争するだけでなく、今後の寺院の在り方についても考えなければならない秋である。

村上鉄瑞師著

菊五判 二八九頁
定価 二、〇〇〇円

〒三〇〇円

法然上人徒然草

所謂作家・学者の著作とは一味も二味も違ったわが法然上人像。一人の青年僧の限りない上人思慕の情念が生んだ労作。特に若き浄土教徒の必読をおすすめします。

自費出版のおすすめ

随筆・句集・歌集

日頃お書き留めの原稿をこの際ご整理されて、あなたご自身の本を作ってみませんか。小社ではなるべく小経費であなたの本が出来ますよう、ご協力させて頂きます。

東京都千代田区神田須田町二一三十一
有限会社 ルンピニ社

電話〇三―(二五三) 三五二〇
三五二九

長篇連載小説 『立ち止まるな善導』を読む

期 待 ・ 希 望

寺内大吉氏の小説が再び登場、しかも題名が『立ち止まるな善導』とは奇想天外である。

さきに『念仏ひじり三国誌』は「法然をめぐる人々」の副題まで付いていたので大凡その見当がついた。しかも、あれだけの長篇大作であった。

今度もまた長篇のようである。すでに前章、「絶唱の経典」には大無量寿経と竜樹菩薩が出て現してそのスケールの壮大なものであることが

窺われる。

なお、題名の善導大師伝ならば、必ず観無量寿経が出されるわけで、前章に次いで来るものが観経であろうと期待している。また、『立ち止まるな善導』という題名の意味するところ奈辺にあるのか、想像することも出来ない。それは普通の言葉ではなく、云うなれば絶対者たる仏の声であり、善導大師にかく云い得る人は阿弥陀仏より他ない。しかも阿弥陀仏の声を聞き

渡 わた
辺 なべ
杜 と
水 すい

(浄土宗西山深草派
大本山円福寺法主)

得る人であった善導大師である。しかし、大師の伝記に、そうした場面がどこにあるのか私には分らないが、いづれそうしたクライマックスが描写されるであらう。

ところで、私が、この題名から直ちに思い出すのは京都・東山永観堂（浄土宗西山禅林寺派総本山）の本尊、みかへり阿弥陀如来の伝説である。

禅林寺の永観律師がある日、本堂の内陣で念仏を称えながら行道していると、いつの間にか本尊の阿弥陀さまが自分の前を同じく念仏しながら行道をされている。驚いた永観律師は思わず声を失ない足が止まってしまった。その時、前の阿弥陀さまが、あとをかえりみて「永観よ、どうした!」と声をかけられた。それを見た永観は感激し「どうか、そのままのお姿を残して下さい」とひれ伏してお願いをした。その尊像が、本尊みかへりの弥陀といつて、お首を半ばうしろに振り向かれた本尊さまとして、珍しく

も奉安されている。

『立ち止まるな善導』の題名が、どこに伏在しているのか、今の私には見当がつかかねるが、この永観物語とみかへり仏の話の思うと、全くこれと似た場面があるであらう。

善導大師は五部九巻を著し、特に四帖疏は観経釈であつて二河白道、その他、いろいろの説話が語られている。

『立ち止まるな善導』と呼びかける人師は仏より外にない。或は竜樹、天親、曇鸞、道綽の先師かも知れない。

いづれ、それは本章において次ぎ次ぎ登場するであろう人師であるが、今、前章において竜樹が出現、これはなかなかの大作、長篇になることを予想し、作者に期待するものである。

題名から色々なことが想像されて、つい、一筆駄弁を弄した次第、望むらくは『浄土』誌の紙価を高からしむるの力作であることを祈念するものである。

浄土句集

一田牛畝選

る。その音はなんとなく涼しい。

雲の峰崩れ拡がり鳥を覆ふ
熊本 山崎 石庭

評 雲の峰が崩れて拡がり、天草の百八の鳥々を覆うている。海は静かである。

花莫座にアイヌ酋長大胡坐

福岡 原 敬二郎

評 北海道の旅にてアイヌ部落を訪れられ酋長が大胡坐していた。花莫座の模様は格別なりしらん。

山笠法被着せたる孫を肩車

福岡 前田 秀峰

評 山笠は、どんたくと共に博多の名物である。褌に法被の姿で山笠を穿くのである。そして子供達も同じ姿で、肩車されている姿は勇ましい。

炎天に校旗あがれる甲子園
京都 岩井 伏水

評 炎天の甲子園に浄土宗の熊本の鎮西高校の校旗が揚がった。浄土宗の高校で、野球の歴史ある京都の東山高校や大阪の上宮高校等と共に、野球の名門校である。

本山の雀蚊や刺しつ腕真赤
福岡 矢野 俊雄

評 本山とは筑後の善導寺のことならん。境内五万坪の森の中にあるので蚊も大きく雀蚊と呼ばれる程である。その蚊に刺され腕が真赤になっている。

マンドリン絃きらきらと音涼し
東京 真野 竜

評 マンドリンの絃がきらきら光って

母の手に安らかな子の昼寝かな
東京 吉田ゆきあ

評 母に抱かれてやすやす眠る子は幸せそうである。きっと立派な家庭教育をうけて立派な人になるにちがいない。

印度より土産の珠数を大施餓鬼
福岡 荒牧 亀船

風鈴の音だけのこして寺書院
福岡 荒牧 還愚

台風のそれし安堵の星仰ぐ
熊本 山崎 松子

京都 岩井 郁子

若妻となりたる吾娘のお中元

東京 満尾衣有子
白玉を供へて母へ旅のこと

福島 秋葉 淳
廃線の鉄路は錆びて夢の花

山梨 青山富貴江

五万人酔ひゐる夏の甲子園

東京 吉原登起子
夏草や伸びきる藁にからむ蔓

神奈川 鈴木美智子
くちなしや玄関の鍵かくしおく

山形 松田 光誉

地下道を出でてまばゆき街炎昼

東京 小笠原香祥
霧晴れて人居りにけり登山道

山口 上野 明達
さみだれや入仏回向洒水の音

山形 松田 允子

庭石に猫の寝そべる暑さかな

東京 田中 秀代
朝顔に人それぞれの思ひあり

三重 山田 歌甫
磨崖仏谿の瀬音に河鹿かな

福岡 服部 光代

十葉の手にある匂ひいつまでも

東京 猪瀬 幸子
ねんころろ透る唄声夜の秋

東京 野本 知子
梅の香のこもる御堂の開かれし

福岡 上滝津弥音

藤長けし刀自の羅よく似合ふ

東京 末常てる子
釣りたての鮎を夕餉に故郷の宿

福岡 下尾 晴子
紅薔薇に故なき妬心つのり来ぬ

群馬 島津 か寿

遠く来て菩提寺に聞く秋の蟬

東京 真野よし子
老姉妹話のつきぬソーダ水

大分 丹羽 難中
骨折の僧にさんげの梅雨の入り

東京 栗原やえ子

日焼して太公望ののんびりと

長野 友洲旋風子
かなかなや木曾は百谷百曲り

朝涼や食前食後お十念
一田 牛畝

浄土宗のハワイ開教(二)

新保義道
しん ぼ ぎ だう

(前浄土宗ハワイ開教総監)

二 初期移民時代の宗教

このような初期日本人移民は対して正式に伝道を開始したのはキリスト教で、一八八六年(明治十九年)九月カリフォルニア・メソジスト教会より、日本人牧師美山貫一が来て日本人間に伝道し、翌年ハワイ伝道会社のハイド博士が組合教会派の伝道を試みたが、日本人専任牧師の必要を痛感し、一八八八年岡部次郎を招いた。岡部は一八九一年(明治二十四年)ヒロに教会を建立した。これがハワイに於ける最初の日本人教会堂である。聖公会では一八九九年(明治三十二年)深尾泰次がコナの孤児院の補佐をし、一九〇八年(明治四十一年)ホノルルへ出て夜学

校及び礼拝を開始している。

日本古来の宗教である神道はキリスト教や仏教よりやや遅れ、一九〇六年（明治三十九年）神道崇敬者がホノルルに神殿を建立し、千屋松恵を祭司とした。これがホノルル大神宮である。同年出雲大社教の宮王勝良が来布し翌一九〇七年（明治四十年）八月社殿を建立した。これが出雲大社教ハワイ分院である。

正式の仏教僧侶として始めてハワイに仏教を伝えたのは、一八八九年（明治二十二年）三月三日ホノルル着の官約第八回船近江丸で来航した、大分県西周東郡白野村光徳寺住職曜日蒼龍である。尚曜日以前にも二、三僧侶が来布しているが、彼等はあくまでも出稼ぎの為に来布した人であった。曜日は真宗僧侶で、同月十九日ホノルル市エンマ街に家を借り、「大日本帝国本願寺派布哇伝道本院」という標札を掲げ、ここを本拠としてオアフ島は勿論、ハワイ、マウイ、カワイの各島で伝道を行った。その結果仏教伝道本院建立の議が起り、その援助を本山に仰ぐ為帰国した。彼の奔走によって一時は実現するかに見えたが、布教方針の一部が真宗教義に異反することですでその援助を得られず、彼は再びハワイの土を踏まなかった。その後暫らく本願寺（本山）が布教に手をつけなかったのが、本山の統制のないまま、布教僧が次々に来布して勝手な布教や行動を敢てしたので、仏教僧侶の行動は信用を失い、後年の各宗正式布教の障害となった程である。

註一 明治時代からハワイを布哇なる漢字で書いているので、固有名詞には布哇と書き、ハワイへ来ることを来布と書く。

本願寺派では曜日蒼龍の布教を正式開教とは認めず、一八九七年（明治三十年）五月宮本恵順を視察員としてハワイへ送り、その報告に基き同年十月ハワイを本願寺開教区と決定、同時に金安三寿をヒロに、山田将為をホノルルに駐在せしめ、翌年里見法爾をハワイ布教監督として派遣した。

浄土宗は本願寺正式布教に先立つこと三年、一八九四年（明治二十七年）正式に開教に着手した。このことは後に詳述する。

日蓮宗は一九〇〇年（明治三十三年）高木行運が来布して布教を始め、同年東本願寺より漣静来が派遣され布教

を始めた。曹洞宗は兩大本山が一九〇三年（明治三十六年）河原仙英をハワイ在留同胞慰問使として派遣したのが最初で、翌年二月管長雲、続いて平井隆機、植岡祖暁が来布して、それぞれカワイ、オアフ、マウイで布教を始めた。

真言宗関係では、以前から布教師と自称する者が加持祈禱をしていたのを、一九一四年（大正三年）醍醐派本山布教部長関寛榮が来布してこれらを統一した。

以上が官約移民時代から大正初期にかけての日本人移民に対する各宗派の働きかけで、華嚴宗、天台宗等は近年のことである。その外昭和に入ってから——特に戦後——所謂新興宗教といわれる天理教、生長の家、金光教、世界救世教、天照皇大神宮教、PL教団、創価学会その他が活発な宗教活動を展開している。

三 浄土宗の開教

イ ハワイ 布哇宣教会時代

浄土宗では、早くから日本人の海外雄飛、特にハワイ日本人移民について深い関心を持ち、一八九三年（明治二十六年）八月二十五日付浄土教報第一五四号に「海外布教附ハワイ問題」と題する社説を掲げ、要旨次のように論じている。

「仏陀の法雨に浴せず宗教上の浮浪の民となりつつある、二万に近いハワイに於ける移民出稼ぎの日本人に対して、若し仏陀の慈恩を伝えなければ道德に素養なき者となり、酒色に耽り、賭博を好み、折角得た金も一夜の夢となってしまう。放蕩は變じて無賴となり、内は以て己が身を害し、外は以て日本の国辱となる。我等は速やかに布教を開始すべきである」（筆者要約）

宗内のハワイ開教の輿論が高まり、浄土宗管長日野靈瑞、増上寺法主野上運海、山口県松月院道重信教、東京伝通院久保了寛、同回向院三宅大賢等宗内有力者の後援のもとに、「布哇宣教会」が結成され、事務所を芝増上寺内に置き、同年十月、浄土教報第一六〇号第一面最上段に次のような広告を出し、布哇宣教の趣旨を載せている。

広 告 (要旨)

一 今回のハワイに於ける我が移住民及び出稼人の為、我が浄土宗より相当の布教師を派遣し、実地布教をさせようとしている。これは何分にも海外の布教である為、その準備、そしてこれを持続する為には多額の資金を必要とする。多少に拘らず寄附をお願いする。

一 布教師は松尾諦定外数名を当たらせる。寄附金は本会發起人芝公園第二号白石堯海宛にお送り頂きたい。

明治二十六年十月

布哇宣教会事務所

発 白 石 堯 海
起 広 瀬 了 眼
人 堀 内 静 宇

布哇宣教の趣旨 (要旨)

日本は内は人口の増加、外は諸外国に刺戟されて海外移民が実施されている。ハワイの総人口の四分の一を占める日本人移民は、労働上欧米の白人と共に競争場裡に立っているが、宗教上よりみれば真に憐れむべきものである。彼等がハワイに移ると共に灼熱の炎砂熱土の中で、日々嚴重なる規律のもとに労役することとなり、親愛

なる父母、兄弟、朋友等と交わることが出来ないばかりか、最も大切な安心立命の教を聞くことも出来なくなっている。先亡の年忌法要も、仏教行事をも行うことが出来ず、全く宗教上の浮浪の民となっている。これを放置すれば生活は荒み、犯罪は増え、取り返しがつかなくなってしまう。又キリスト教に走る者も多くなってくる。ここに於て我々は先づ二、三の布教師を派遣し、わが日本人移民出稼ぎ人の為仏陀の教を伝え、一は宗教上の安心を与え、一は道德上の教養を努め、現当二世の福利を謀らうとするものである。我々の微衷を諄とせられ、協力せられんことを願う。

以上のような経過を辿って布哇宣教会は、一八九四年（明治二十七年）三月十六日長野県飯田市柏心寺の松尾諦定を、下調査の為ハワイへ派遣した。松尾は後述の岡部学応到着後要旨次のような報告を日本へ送っている。

小生は来布以来日尚浅き為好報を呈することは出来ない。現在の情勢は某宗僧侶の所業が宜しくなかったの、一般僧侶に対する信用は地に堕ちている。これを挽回する必要がある。又キリスト教界では岡部次郎、綱島佳吉等諸々たる人物が来布して、ハワイをキリスト教の領分として他教の進出を妨げる計画のようで、これに対する処置も講じなければならぬ。

将来布教の望みは十分にある。とにかく目下の急務は内外に注意し、僧侶に対する疑惑を去り、人々に信頼の念を起さしむることが大切である。

本来ならば岡部師と別々に布教所を置くのが得策ではあるが、経済的に許されないのでこの小屋に仏像二体を安置している。出来れば一カ月十ドル位の家に移転したいと思う。又岡部師がヒロへ出張した方がよいとの御指示ではあるが、これ又経済的に出来ないのので当分はホノルルに滞在し、時機を見て交替にて諸所を巡回したいと思います。（浄土教報一八五号）

松尾が同年十一月六日から十二月二十日までカワイ島に出張し布教した詳細が、同じく浄土教報第二〇九号に

載っている。

次いで布哇宣教会は、山口県大島郡屋代村西蓮寺住職岡部学応を布教師としてハワイへ派遣した。同師は松尾に遅るる二カ月、一八九四年（明治二十七年）五月四日横浜を出帆同月十四日ホノルルに到着、検疫、通関を終えたのは一週間後の二十一日であった。午後一時松尾に迎えられて上陸、同師の宿所ヌアヌ街ボルキ七七番邸に入り、供奉の尊像を安置し、松尾と布教上の計画を打合せた。岡部の来布を聞いた自坊西蓮寺の教会衆及び同郡の人々が追々参拝した。布教上の見込みとしては、松尾同様僧侶は余り信用されていないが、孜孜忍耐して布教すれば好結果を見ることが困難でなかうと報告している。（浄土教報一八四号所載六月三日付通信の要約）

註2 官約移民第一回船来布者の内訳は、総員九四六人中山口県人が四二〇人、その内大島郡出身者が三二〇人であった。それ以後も大島郡出身者が非常に多かった。岡部が布教師として来布したのはこれと深い関係があったと思われる。

岡部は暫らく松尾と共にホノルルで布教したが、二カ月後の七月十七日ホノルルをクロードン号にて出帆、翌十八日マウイ島カフルイ港に到着、花岡旅館で朝食をとり、約三マイル離れたスペクルスビル耕地へ赴き、自坊西蓮寺教会衆及び山口県出身者の好意で各地で布教、日本人墓地にも参拝している。マウイ島での布教は約二週間而もスペクルスビル耕地のみで終っている。八月四日マラエアよりキナウ号に乗りハワイ島ヒロへ向った。

註3 花岡旅館はブウネ教会堂の創立者原聖道が、一時的根拠として各方面に出張布教した所である。

八月五日ヒロに到着、本願寺に桑原を訪ね布教上につき云々話し合い、同七日ハカラウに赴き西蓮寺教会衆を訪ねたり、諸所で布教又墓参りなどをした。九月四日土人カルナの家の一室を借りて本拠として布教に従事した。土人の家を借りている関係上土人にも南無阿弥陀仏を教え、彼等も廻らぬ舌にて念仏を唱えたという。折しも日清戦争に召集された龍興某の馬を布教用に三十五ドルで買い請けたと報告している。（浄土教報第一九七号）

岡部はハカラウに数カ月滞在した後ハマクア郡パウハウに移って布教に従事し、一八九六年（明治二十九年）ハワイに於ける浄土宗最初の寺、ハマクア仏教会堂を建立した。これについて森田榮著『布哇五十年史』は次（原

文のまゝ)のように記述している。

ハマクア仏教会堂は 布哇に渡来せる我が日本仏教の正式布教に着手したる最初の寺院にして 明治二十七年(一八九四年)山口県大島郡屋代村西蓮寺住職岡部学庵師が 浄土宗の選抜僧侶として派遣を命ぜられ渡布せしものなり 茲に於て岡部師は阿弥陀仏像を背負い各地を巡錫し所々を遍歴したるのは後 布哇島ハマクア郡に入れり 当時労働者上りの俗僧又は本国に僧籍を有せざる僧侶にして無責任なる行動を為せる者等の或は寺院建立と称して寄附金を募集し之を詐取る惡漢徘徊し 有縁の地容易になく普く辛酸を極めたるものにして 師の本郡に入る説故國檀徒の者に邂逅し 茲に始めて眞の僧侶なりと判明し在留日本人は非常に喜び岡部師亦之を有縁となし カラッパアの地にありし葡萄牙人所有の一家を借り受け「大日本伝來阿弥陀如来奉安所」と大書せる掲札を掲げ仮居と定め 以來各地を訪問し同胞労働者間に説教し 無縁墓に読経する等大に布教伝道の為奮勵努力する処あり 勿ち寺院建立の議起り有志の奔走となり同胞一般の協力一致するに至り 仮令母國に於ては何宗派なるとを問わず ハマクア一郡五耕地在留の日本人の菩提寺として 一個の寺院を創設すべしとの事に一決せり 而かも其當時駐在帝國總領事島村久氏巡回せらるるに際して請託に此事を以てす 島村總領事亦之を賛し金三百弗を補助せられ 茲に岡部学庵師他一般有志同胞の協力により更に一千余弗の寄附金を得るに及び 茲に五耕地の中央なるバウハウの現在の位置に 明治二十九年(一八九七年)殿堂を建築し 十一月二十六日盛大なる入仏式を挙行するに到りしものなり 敷地は永代無償貸与を得たるものにして 他に各五耕地に一カ所宛同一の下に墓地を貸与せらるる是れ浜桑仏教会堂の起源にして又た浄土宗布教開教着手の沿革の概況なり

このように岡部学庵が寺院を建立したので、布哇宣教会は明治三十一年(一八九八年)六月田中摩訶衍をハワイへ派遣した。岡部は同年帰国している。

(つづく)

エ
ッ
セ
イ

娘の愛車「ウサコ」

——伊豆高原徒然草より——



娘のひろみが自動車の免許を取得して三日目、少々無謀かとも思えたが、東京から伊豆高原の家まで運転させてみた。アメリカでは

木^{きの}
下^{した}
隆^{りゅう}
一^{いち}

(随筆家)

高校の時からやっていたからスピードには慣れていたが、日本へ帰ってみると、種々雑多な標識が読めず、ある日友人の車に同乗した

時、「ひろみちゃん、あれ何のしるしか判る？」と路面に描かれた二つの菱形を指されて、それが、行先に横断歩道あり、と判らず、「アメリカにはこんな標識なかったわ。信号だって、市街地に行かなければなかなかお目にかかれないし……」と言ったものの、ショックを受けたらしく、「私、車の免許取るわ」と、翌日から近くの教習所へ通い始めた。それからタクシーに乗る時は助手席に坐らせて、プロのハンドル捌きを学ばせ、バスに乗る時は努めて左の最前席に坐るよう指示して、運転感覚を身につけさせた。

「日本のバスの運転手さんて、世界一だと思ふなあ。五センチ位の間隔でも擦れ違つて行くんだもの。神技としか思えないわ」

常々そんな感想を洩らしていたが、教習所へ通うようになって、一層その感を深くしたようであった。

雪の日も風の日も教習所通いが続いた。初めの頃は「あしたは七時半に起こして」など

と言っていたが、そのうち時間が来ると自分で起きて行くようになったし、テレビの天気予報の天気図を見て、「日本海と日本の南岸に低気圧か、あしたもまた雪になるのかしら」と明日の天気まで心配するようになった。「お前が曲りなりにも天気図が読めるようになっただけでも収穫だよ」

と言うと、

「府中では一発で免許取って来ますからね」と、その宣言通り一回で合格した。

三月二十九日、初の長距離ドライブの日である。全行程約百五十キロ。兎好きの娘が「ウサコ」と名付けた一六〇〇ccのホンダ・アコード（この車は長年隣人だった方の形見として娘が戴いたものである）は、明け方近く降った雪で薄化粧していた。

「ウサコ、頑張つて行こうね」

自分に言い聞かせるように、娘は軽く車体

を叩いて、そんなことを言った。

午前五時半、出発。出発に際して、

「制限速度を守ること。車間距離は充分に取れ。他車の挑発には乗るな。これは路上の垂訓だ」

助手席に坐った。運転歴ゼロのナビゲーター役の私は、極く常識的な注意を与えた。

「判ってます！ さあウサコ行くわよ」

アクセルを踏むと、車は素直に滑り出した。青梅街道を四面道で右折、瀬田で東名高速道路に乗り、一路西進。時間が早いせいか、行き交う車の殆どが大型のトラックである。轟音をたてて抜き去って行くそれらの車の左車線を、我が「ウサコ」は時速七十キロ位で、それでも快調に走って行く。

砂利を満載したダンプカーが、築地市場から焼津へ帰って行く冷凍車が、次々に百キロ以上のスピードで追い越して行くと、その度にこちらの車体はビリビリと震えた。

「おお怖。でもウサコ、大丈夫だからね」

こうなると、完全に自分自身に言い聞かせているとしか言いようがない。

ハンドルを握っている娘も必死なら、隣に坐っている私も必死である。右目で速度計と娘の状態をチェックし、左目で前方を注意しなければならぬ。目はチカチカして来るし、口中は渴きつ放しである。走行中は別に感じなかったが、海老名で休憩した時、降りるとヨロヨロと足がもつれた。余程全身に力をこめて踏んばっていたらしかった。只一人物見遊山的だったのは女房である。「今日は富士山が見えなくて残念」とか、「あら、あれ桜かしら……桜じゃないわね梅よね」と専ら車窓を過ぎる風景を満喫している。「関係ないこと、あまり言わないでね」女房の一言一言に娘の声がだんだんとんがって来る。「バスにも書いてあるだろ、運転中は運転手に話しかけないで下さいって。飴でもなめて静かにしてろよ」

熱海を過ぎて伊東の手前までは、S字カー

ブの連続である。何度かヒヤリとさせられたが、午前九時五十分、無事我が家に到着。海老名での休憩時間を差し引くと、三時間半足らずで着いたのだから、初ドライブとしてはまずまずの時間であった。

「ウサコ、よく頑張ったわね。ゆっくりお休みよ」

車もさることながら、娘にも仮眠させる。

庭に、久しぶりにうらうらと春の日射しが降りそそいでいる。雑木林はまだ枯木立のままだが、キブシがようやく萌黄色の璽瑠をかけた始めた。しかしその花房は十センチにも満たない。季節は約一月遅れている。

「長い冬だった」

独りごちながら、芝生に散り敷いた落葉を掻いていると、娘が起きて来た。

「いいお天気。家にいるの勿体ないみたい。どこかへ行ってみましようか」

「ひろみちゃん、あなた大丈夫?」

「私は平気よ」

「下田の海でも見に行くか」

午後になって、下田へ下る国道一三五号線は行楽の車で混んでいた。制限速度で走っていると、後ろからビービーブーブーせかれる。

「そんなに速く行きたきゃ、行けばいいでしょ。でもここは追い越し禁止ですからね」

娘は頑なに速度を守って走る。「バカ、モタモタするな!」と罵声を浴びせて抜き去って行く車もある。「事故起こさないように」と娘もやり返すが、もうその時は相手の車は数十メートル先にいるから、こちらの声が届くはずもない。

「若葉マークを貼っていても、誰もが取り立てホヤホヤとは限らないからね。免許取得後今日で三日目とでも書いて貼っておくか」

と私が言うのと、

「そうね、そうすりや恐れをなして誰も近づかないかもね」

娘は笑った。

帰路は女房の提案で、下箕作を経て、四一四号線という山間の道を辿って河津へ出た。沿道の梅はようやく満開である。

「全然咲いていない木もあるのね」

「二もとの梅に遅速を愛すかな——と言ったの燕村だったかな」

「崖急に梅ごとごとく斜なり、子規。全くその通りね、この辺の景色」

父と娘の文学的会話に、地図を見ていた女房が突然割り込んで来た。

「へえー、ひろみちゃん、この道昔の下田街道だって。天城峠を越えて川沿いの道を下って来て、ここで山越えして下田へ出たのね。」

大変だったでしょうね、伊豆の踊子もこの道をテクテク歩いたんだわ」

「どうでもいいけど、ママも随分変な道を走らせるわね」

「勉強になるでしょ」

「そんな。……涼しい顔して言わないでよ」

河津の町はいつかすっかり暮色に包まれて

いた。昼間隠やかだった海は強風に煽られて荒ぶれる海と化していた。

その夜、生暖かい風は家を揺るがせて吹きすさび、電線は一晩中悲鳴をあげ続けた。

翌三十日、起きて来ると娘は聞いた。

「今日はどこへ行きますか」

「箱根なんかどうかしら」

と女房。

「どう行けばいいの？」

「大室山の裾を廻って遠笠山道路から伊豆スカイラインに入れば、十国峠まで一直線だ」

「ひろみちゃん、あなた疲れてない？」

「私はへっちゃらよ。ママこそ疲れてんじゃない？ 今日後はろで独り静かに景色を楽しんで下さいませ」

「ひろみ、お前も決して嫌いな方じゃないな

あ」

と私が苦笑すると、娘もニヤリとした。

「さあ、山登りの前にスタンドに寄って、ウ

サコに御飯あげなきや。大分お腹空かしているから」

この日は予定通り十国峠から残雪の芦の湖スカイラインを通って湖尻へ抜け、大涌谷から小田原を経て、熱海、伊東と昨日の朝と同じコースを帰って来た。三十一日は伊東から亀石峠を越えて修善寺へ出、西伊豆スカイラインを通って堂ヶ島、松崎、雲見、石廊崎、下田を走破して伊豆高原へ。そして休む間もなく、翌四月一日には東京へ帰って来たのだから、いささか狂気の沙汰であった。この間の走行距離はどの位になったか、見当もつかない。

娘もよく耐えたが、車も一回のエンジントラブルもなく走り抜いてくれた。

「ウサコ、有難う。今晚はゆっくりお休み」

と、娘は車に劳いの言葉をかけていたが、「ウサコ」にゆっくり休む暇などなく、翌日から何かとこき使われている。

この度のドライブで気づいたのは、歩行者と自転車に乗った人たちのマナーの悪さであった。自転車は右側を平気で走って来るし、歩行者は歩道があるのに車道を潤歩する。クラクションを鳴らせばジロツと睨みつける。人身事故が起これば、すべて自動車が悪いとされるが、ルールを守らない歩行者や自転車乗りにも全く責任がないとは言えないものを感じた。突然の飛び出しに急ブレーキを踏んだことも度々あった。制限速度を守っていたから冷汗をかくだけで事無きを得たが、もう十キロもオーバーしていたら、どうなっていたか判らない。車は急には止まれないのである。娘には今後も制限速度は遵守させる。そして無責任な歩行者を見て、ひよっとしたら俺もあんな歩き方をしていたのかも知れないと自戒の念を深くした。いろいろと考えさせられることの多かった四日間であった。

(了)



立ち止まるな善導

〈4〉

寺内大古

挿絵・松 濤 達 文

前章・絶唱の經典 (四)

十

少年サビヤは大崖仏塔へ帰り着いて、朱駒波城内での見聞をひとわたり阿闍梨マトナ師に報告したあと「隠れ洞窟」と急いだ。マト

ナ師には告げなかった羊皮紙の内容についてタバス尊者に問いただしておかねばならなかった。

阿闍世王のことである。

しかしタバス尊者は性急にその話題には触れてゆかず、羊皮紙に書写された「涅槃経」



をしきりと感服した。

「なるほどな、獣の皮に文字で残すか。それならば誰もが、いつでも読誦できる。わしらのように片っ端からここへ詰めこんでしまつて、記憶した者がいなくなつたらどうなるのか。經典は減びてしまうではないか。仏教が真に大衆部のものとなるためには、易しい文字でみんなが読めるようにしなければなるまい」

謎の法師龍猛の主張を支持した。

「釈尊が涅槃へはいるのを中止なさつてまで、この男だけは救わねば、とおっしゃった阿闍世王とはどういう人ですか」

「うむ。釈尊が亡くなられて四カ月ばかりして五百人の弟子たちが集つた。釈尊が生前にお説きになった仏法をまとめる仕事だな。王舎城へ集つたので王舎城結集と呼ばれてゐる」

「王舎城結集のことは何度も聞きました」

「その折、万事面倒をみたのが王舎城主の阿

闍世王じゃよ」

「では、たいへんな仏教の外護者ですね。それがなぜこの男だけは救わねば死んでも死にきれない、などと釈尊はおっしゃつたのでしょうか」

「この世には根源的な悪というものが実在する」

「阿闍世王はその悪玉なんでしょうが」

「阿闍世王一人の罪ではない。人間が生きていること自体が抱えこんでいる悪じゃよ」

少年サビヤには理解の届かない実存の深層断面だったかもしれない。

「しかし、いまわたしが学習している無量寿経、その阿弥陀仏はどんな悪人でもお救いになるのでしょうか。なぜ王舎城結集の面倒までみた仏教信者の阿闍世王をお救いにならないのですか。それと……」

「何だ、サビヤ」

少年の真剣な眼差しを長老も深い視線で受けとめていた。

「いつか尊者はおっしゃいました。阿弥陀仏というのは、釈尊の慈愛と悲願とを人格化した存在なのだと。あの羊皮紙の経文で、阿闍世王を救わねばとおっしゃった釈尊のお心は、そのまま無量寿経で誓われた阿弥陀仏の万人を救いきる願いと同一のものではないのでしょうか」

「そうだよ、サビヤ。そのことは無量寿経にもちゃんと書いてあるはずだ」

「いいえ、ありません。わたしが学習している限りでは、一度も阿闍世王の名前は登場してまいません」

「そうか。そうだったか……サビヤ。わかった。いまお前に教えている無量寿経は四十八願の方だったな。わしが鷲ノ峰で教わってきたのには二十四願の無量寿経というのもある。混乱するといけないので、一つに絞っておいたが」

まさしく無量寿経には前期の二十四願経と後期の四十八願経とがあるのだ。前期の分は

中国へわたり呉の支謙、後漢の支婁迦讖の訳となつてゐる。正確な経名は「仏説阿弥陀三耶三仏薩婆檀越度人道経」と「仏説無量清淨平等覚経」とである。そして後期分は曹魏の康僧鎧訳であり、唐の菩提流志訳である。簡略化して呉訳、漢訳と言ひ、魏訳、唐訳と呼んでいる。

その前期二十四願経に

——時阿闍世王太子、与五百長者迦羅越子、各持一金華鏡、俱到仏所。前為作礼仏、以頭面著仏足。皆持金華鏡、前上仏已。悉却坐一面聽經。阿闍世王太子、及五百長者子、聞阿弥陀仏二十四願。皆大歡喜踊躍。心中俱願言。令我等後作仏時、皆如阿弥陀仏。仏即知之、告諸比丘僧、是阿闍世王太子、及五百長者子、却後無數劫、皆当作仏如阿弥陀仏……

阿闍世王は五百長者子の迦羅越子と二十四願を聞き、自分たちも阿弥陀仏によって救われたいと願った。釈尊は比丘一同に、この王と長者子は無数劫を経たあと間違いなく阿弥陀仏の救いを得て仏に成るであろう、と告げたのである。

なぜ二十四願経から四十八願経へうつる過程で阿闍世王太子の名が削除されてしまったのだろうか。二つの解釈がある。

一つはその第十八願に「五逆を犯し、正法を誹謗した者を除いて」阿弥陀仏は我が名を称える者のすべてを救うと誓っている。阿闍世王はその父王を間接的にはあるが殺害し、また悪友の提婆達多(ダイバダッタ)と組んで釈尊の殺害をまで企らんだ。まさしく阿弥陀仏救済の除外例にびったりあてはまる。だから削除したという解釈だ。

二つ目はさらに深まって二十四願経における阿闍世王の救われ方に問題を残すのではなからうか。「却後無数劫」と書かれている。

阿弥陀仏の国へはゆけるが、すぐには救われない。五逆謗法のために長い時間がかかる。この相対的な救済思想に誤まりはないであろうか。悪人も善人も平等に救われる。差別のない往生こそ正しい浄土思想だ。その立脚点から誓願の章をふやしてゆく過程で阿闍世王の項が削除されたというのである。

正解は求め得べくもないが、いずれにせよ大乘浄土思想において阿闍世王の立場は重要であった。人間にひそむ根源的な悪を、その悪がもたらす悲しみを、阿闍世王は全身で背負いこんでいる。

それはともかくとして、タバス尊者は少年サビヤに請われるまま阿闍世王太子の境涯を物語っていた。

十一

マガダ国は中部インドに位置した古い王族国家である。精強な兵を蓄え戦車を保有し、

近隣に勇武を誇った。

これは釈尊の死が近ずいた晩年の話だが、マガダ国王阿闍世がガンジス河中流のヴァッジ人による商業都市へ攻めこもうと企らんだことがあった。最終の決定を阿闍世王は釈尊に求めてきたが「そんな戦争は必ず負ける」と釈尊は警告している。理由としてヴァッジ人たちは商業を主点とし文化を重んじ、外形はひ弱いが、共和制を守って万事を会議で決定している。団結力が非常に強い。その点マガダ国は独裁権力が支配しており、局地戦争では勝つだろうが最後には必ず負ける、と言った。国王は釈尊の警告を聴き入れてヴァッジ侵攻を諦らめた、と南伝「大般涅槃經」は記述している。

釈尊が悟りを得たガヤーの地もこのマガダ国に属しており、この成道後、国内を各地で説法して多くの信者を得た。しかし釈尊仏教が急速に発展したのは、阿闍世の父で国王だった毘婆王（ビンバシャーラ）の帰依を得てか

らである。

「阿含經」はこう書く。

——我が弟子中の第一の優婆塞（ウパッサ・在家信者）は、恵施を好んで喜ぶ者は毘婆王これなり。

いわゆる釈尊が教化を拡大する過程で有力なスポンサーだったことがわかる。

もっとも「釈經論部」にはこんな記述もある。

毘婆王は暴雨が連日続いて領内の農民がたいへん苦しんだ。そこで梵天に頼んで暴雨を中止してもらった。晴天が回復したが毘婆王は梵天に全く謝礼らしいものを支払わなかった。梵天は怒って毒蛇に変身し、マガダ領内を荒らしまわったという。

毘婆王の宮殿は王舎城と呼ばれた。その名称の由来としてこんな話が伝わる。

ひとところ城外の民家が新築工事をするとき、必ず火災に遇って焼ける。ときには焰が宮殿

に迫ることもある。だが王舎城には不思議と延焼しなかった。そこで毘婆王は民家が新築工事をするとき呪術師たちに、「ここは王舎だ」と唱えさせることにした。民家ではなくて王舎——王の住処だぞという意味だ。それ以後火災は激減した。

さて毘婆王は王舎城で美しい夫人の韋提希（いだいけ）と何一つ不自由なく暮らしていた。唯一つの悩みは夫婦の間で子宝のないことだった。

毘婆王は占星術師を招いて前途をうらなわせた。「お妃の身に王子が宿るのは、ある老人が死んでからです。つまりその老人が生まれ替って新しい生命となるのです。それは勇武に富んだ頭脳のすぐれた王子です」と彼は予言した。「その老人とは？」「遙か北方の山に棲む仙人です。志操も高潔な立派な修法者です」毘婆王は悩んだ。「それは有難い。そんな聖者の生まれ替りが我が子となればマダ国は万々歳だ。それで、仙人はいつごろ

死ぬのだろうか」占星術師は言った。「きっと三年後です」「あと三年後か」「そうです。三年間お待ちになれば王よ、あなたは願ってもない子宝に恵まれます」

毘婆王はこの予言を韋提希夫人に告げた。夫人も希望で腫を輝かせた。

首を長くして待つ三年。だがその歳月はやや長すぎた。

ここまで語ってタバス尊者は注釈をほどこした。

「サビヤよ。このあとのことだが、諸経典は二つの説を採用している。待ちきれなくなったのが毘婆王だったという説。いや韋提希夫人の方だという説。どちらにも一面の理がある。毘婆王説は攻守同盟を結んでいる隣国からしきりと養子縁組を持ちかけられていたということだ。韋提希夫人説は、王の身辺に近ごろ若い美女が現れてまごまごしていると、そちらに子種が出来てしまうかもしれぬ。い

ずれにしても男の権力慾、女の愛慾から発した迷いだ」

少年サビヤは韋提希夫人説の方を聞いたが、
った。

「王妃は何と言ったのですか」

「うむ。あの仙人はな、すでに老人。これから先三年生きようと二年生きようと同じではないかとな。それよりも妾たちの子供が一日も早く生まれた方が……恐ろしい考えた。王はこのささやきを聞いて、うなずいた。まず死者を仙人のもとへ送った。自殺することをすすめたのだ」

「それは身勝手な」

「そのとおり身勝手だ。自殺の代償として仙人の霊を国神として王舎城に祀ることを約束した。だが仙人は訊きいれない」

「訊きいれませんか」

「たとえ三年間であらうと天寿が尽きるまで自分は生きるんだと言ってな。使者はすでに毘婆王から秘命を受けていた」

「どんな秘命ですか」

少年サビヤはごっくり睡をのみこんだ。

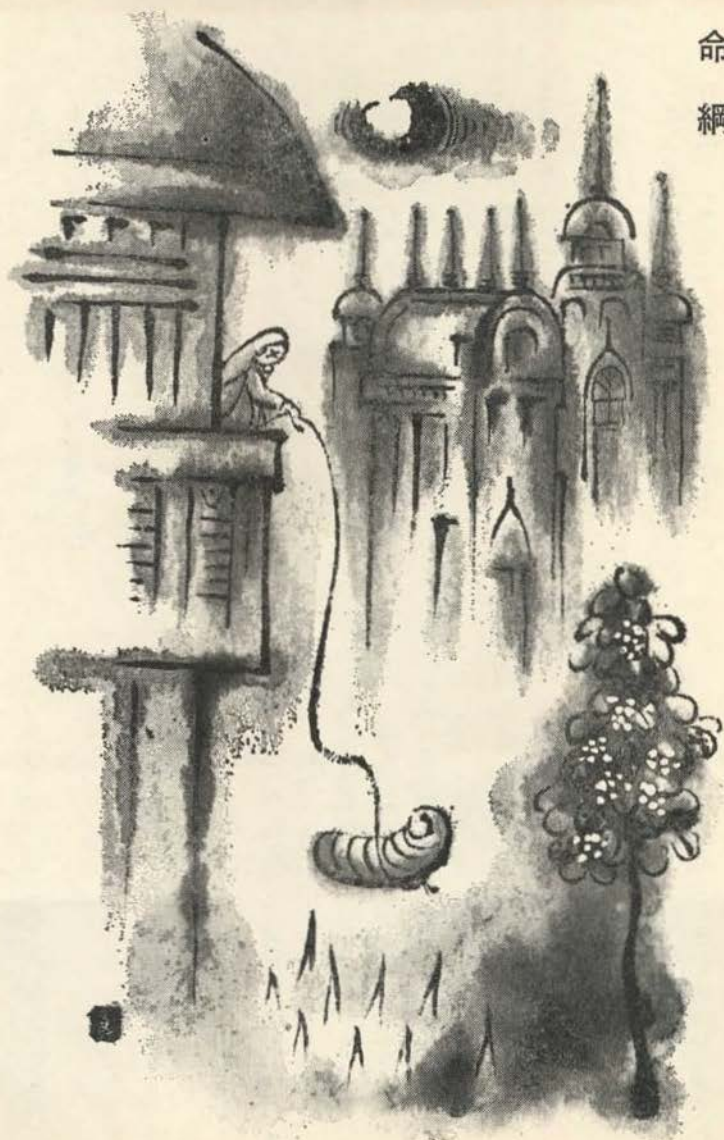
その秘命とは仙人が自殺を拒否した場合に刺殺せよであった。使者が刃をかざしたとき老仙人は言った。「お前は帰ったら王に告げよ。わが命が未だ終っていないのに王はわしを殺した。もしもわしが王子となって生まれ替ったならば、必ず王を殺してやる」と。怨みの形相を結んだまま死絶していった。

仙人が殺されて幾ばくもなく韋提希夫人は「有身ヲ覺ユ」で、妊娠したのである。やがて夫人の胎児は順調に育っていった。王はある日、相師(占星術師)を招いて夫人の身を診させた。「宿られた児は間違いない王子です」毘婆王の表情はけわしくなってきた。相師が帰ったあと韋提希夫人に相談した。

「生まれてくる王子は必ずわしら夫婦にアダをなすであらう。この子を生かしておくわけにはいかぬ」あれほど待望した男児誕生だ

☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆☆

命
網



と言うのに早くもその死を願う毘婆王であった。そして殺害方法を夫人に指示した。

出産室は王舎城高樓の頂上に設けられた。

赤ん坊を生んだら、すぐにその窓から投げ捨てよ、というのが王の命令だった。十メートルを越える高さだ。生き逃がれるすべはない。それでもなお万全を期して地上には刃を天に向けて幾本も突き立てておいた。

月満ちて時迫り、韋提希夫人は高樓の産室へ登った。無事に安産、男児が元氣のいいうぶ声を発した。

夫人は抱いて窓辺へ這い寄った。王の命令通り投げ落したわけだが、ひとすじの綱の端を握っていた。じつはこの綱、赤児の身体に巻きつけてあったものである。

高樓の壁に添ってゆっくり落下していった赤児は刃先に突き刺さることもなく地上へ着地した。韋提希夫人は待婢を走らせて命綱を回収させた。王子の身体には小指を一本失った以外はどこにも損傷はなかった。

この赤児が成育して阿闍世太子となった。別名を折指太子とも呼ばれた。

生まれ育ってゆけばわが子である。可愛さは日々にのつた。まして韋提希夫人は溺愛である。太子阿闍世も素直な少年に成長していった。

ここに現れたのが提婆達多である。彼は釈尊の異母弟とも従弟とも言われた。そんな身内にもかかわらず釈尊に強い反感をいだいていた。原因は釈尊のもとへ出家入門を請うたとき、にべもなく拒否されたことによる。

提婆はそれ以前、呪術者に師事して幻術を修行していた。それが宗教者となる道だと思ってきた。事実、古き波羅門はそうだった。だが釈尊の新しい宗教は呪法・幻術をきびしく禁じた。

いかに身内とは言え、ゆがんだ修法過程を歩いてきた提婆の入門を許すわけがない。いや、身内であればなおさらだろう。提婆の邪法が弟子たちに悪影響をもたらすからであ

る。

高弟となった舍利弗や目犍連もかつては幻術の修得者だった。だが絶対にそれを行使しないという約束を釈尊との間に取り交わしていた。現に釈尊以下彼らの出身仲間である釈迦族が侵略されようとしたとき、目犍連は幻術を使って防ごうと提案した。しかし釈尊は許さなかった。

その提婆が王舎城へはいりこんできた。父の毘婆王が釈尊に帰依していることを知り、対抗するために青年になりかけた阿闍世太子に接近し、お得意の幻術を披露して彼の心を掴んだのだった。

城内へ出入りするうちに壁に泌みこんだような太子出生に関する噂話を聞いた。「父王は絶対に王位を継がせないぞ。それどころか、殺すかもしれない」と吹きこんだ。疑心暗鬼になると人間は不安材料ばかりを集めるに収集しはじめる。「壁の噂」に尾ヒレが付いてふくれ上がる。

ついに父毘婆王を逮捕し、城内に新設した七重の牢獄へ幽閉した。しかも食物を全く与えず、餓死を強要したのである。

わずかに面会を許された韋提希夫人は、全身に栄養食品を塗りこんだ。牛や羊の乳を精製して粘液状としたもので、「蜜」と呼ばれた。その蜜に乾した飯や麦を混ぜこんだ。これを全身に塗りこめるのである。

獄房へきて面接の間、毘婆王は夫人の全身を舐めまわすことで過ごした。辛らくも露命をつないだ。

その間、韋提希夫人はしばしば王舎城の北東にそびえる「鷲の峰」（靈鷲山）へ使を出した。釈尊の教示を求めた。

釈尊としてもこの「生き地獄」には手が出せなかった。ひたむきに仏の救いを祈らせるしかない。

二十一日間がすぎた。すでに王位をほしいままにしている阿闍世王は看守長を呼んだ。「父はもう死んだか」と問い詰めたが彼は首

を振るばかりだった。餓死しない理由をた
すと韋提希夫人の協力があるからだとい
う。阿闍世王は複雑な表情で母の私室へはい
ていった。

十二

「母上、何ということなさるのですか」

「何ということとは……」

「賊である父上を助けているではありません
か」

阿闍世王は悲しげに韋提希夫人を見つめ
た。

「しかしお父さんはお前にとっても妾にとつ
てもだいじなお方です。それが餓え死になさ
る。黙って見ていられますか」

「いいですか母上、よく聞いて下さい。父
上は私に殺そうとしました。生まれた瞬間、
刃の上へ突き落したではありませんか」

「それは妾が防ぎました」

「知っています。だからこうして母上には自
由を許しているのです。私と父上との間は戦
いです。お互いが戦場に立っています。殺す
か殺されるかです。その戦場へ母上、あなた
はまぎれこんで来ようとする。敵だとはつき
りすれば殺さないわけにはいかない」
阿闍世王は青ざめ、顔面は激しくけいれん
している。

「殺しなさい。そんな……血を分けた親子が
憎み合って、夫婦が敵と味方に別れて殺し合
うなんて、妾はそんな世界に生きていたい
と思いません」

「母上、ああ母上」

俄かに阿闍世王の両眼から大粒の涙がこぼ
れはじめた。激しく嗚咽する。

「何がそんなに悲しいの、阿闍世」

「お気の毒な母上。こんなお美しいのに大き
な不幸を背負っていらっしゃる。私が愛して
いるのは母上、あなたただけだ」
「妾だってそうですよ」

夫人も涙ぐんできた。阿闍世王は涙のなかで、

「しかし、元はと言えば母上、あなたが悪い。最大の悪人だ。あの老仙人を殺させた。

つまり私の過去を抹殺したことです」

「阿闍世や。妾たち親子に悪い因縁があったとすれば、仙人を殺したのはもちろんですが、あの占星術師の話を王も妾も信じこんでしまったことです。阿闍世や、あなたはまぎれもなく父王の胤（たね）であり、妾の身体から生まれ出た子です」

「この身体はそうですが、私の靈魂はその仙人の生まれ替りだ。あなたがた夫婦はそれを殺した」

「違いますよ、阿闍世。人間の靈魂に前世があるとすれば、それは仏の国からやってきたものです。誰もが仏性を持って生まれてくるのです」

「それはシッダルタ（釈尊）の世迷い言だ。誰も証明することは出来ない」

提婆達多の呪法を信じこんでいる阿闍世王には釈尊の説を聴こうとする耳を持たなかった。そして、再び感情のゆれ動く若者の姿にこえつた。

韋提希夫人を抱きしめて泣きむせぶのであった。

「ああ母上、女の身は悲しい。自分で気づかないところで悪を犯している。正しいと信じながら嘘を吐く。私を愛し抜きながら、どこかで隠れて裏切る。悪のすべてがあなたの美しい身体の中から結晶しているのだ」

そう叫ぶや、夫人の身体を強く突き放した。倒れこむところへ白刃をかざして躍りかかった。その胸をひと突きで……という瞬間、かねて廊下で様子をうかがっていた二人の重臣が飛びこんできた。阿闍世王の異母兄弟にあたる耆婆王子（ぎば）と大臣の月光だった。

「お待ちなさい、王よ」と羽が鋭めにした。

「天地が開けて以来、大恩ある父親を殺した王は一万八千人をこえたと聞いています。しかし母親を殺した者は絶無だそうです。王はその最初の大逆を犯そうとなさいますか」
 「そうです。この王舎城はぬぐいがたい汚れた血でおおわれてしまうのです。王がどうしても母后を殺すとおっしゃるのなら、私も二人はこの王舎城を出てゆかねばなりません」

阿闍世王は声をふるわせて、
 「著婆よ。お前はわしと兄弟の間柄だ。兄の苦しみを理解してくれぬのか。それにこの母后は、お前の母親にとっては許しがたい敵ではないか」

著婆は涙ぐんだ。
 「王よ、何をおっしゃるのです。王たる者がそのような邪悪な眼で人間を見てはなりません」

阿闍世王は母の殺害だけは思いとどまった。ただし父王に近づけないように城内の離

れた場所で厳重監視のもとに軟禁した。かくて毘婆王は完全に糧道を絶たれ、日に衰弱していった。

そのころ阿闍世王の王子で優陀夷（ウダイ）という四歳になる子が指を腫らして苦しんでいた。膿が溜まってしまったのである。

この優陀夷が思春期になって「陰、虫の喰うところとなり……口を以てその陰をふくみ、暖気にてふく」話はすでに紹介した。フエラチオから母子相姦に至った話である。膿を持ち易い体質だったのかもしれない。

痛みを訴えるわが子に、阿闍世王はその指を口中にふくみ、膿を吸い取ってやった。

韋提希夫人はこの事実を王に近侍する者から聞いた。軟禁室へ阿闍世王が覗きに來たとき、

「あなたもお父さん、そっくりのことを知っていますね」

阿闍世王は訊きかえした。

「何の話ですか、母上」

「王子の指をくわえて臍を吸ってあげている
というではありませんか」

「頑でない子の苦しみは見るに忍びません」

「あなた自身も幼いころ父上から同じことを
して頂いたんですよ」

「何ですって……」

「足指にトゲが刺さって、やっと抜けたけれ
ど、あとが膿んだんです。足は腫れあがっ
て、声をあげてあなたは泣き続けた。父上は
その足指をくわえて」

「臍を吸って下さったんですか」

「そうですよ」

「ああ……私を殺そうとしたあの父上がで
すか」

「そりゃ生まれ出る前はお迷いにもなりまし
た。でもいったん生まれた以上。そりゃ可愛
がってあなたを育て上げたんですよ」

「それは、知らなかった。母上、許して下さ
い」

「えっ！」

「父上をすぐに牢から解放します。母上もこ
の部屋から出て下さい」

「阿闍世や、わかってくれたんだね」

「子供のことを言われて、初めて眼がさめま
した。そうですとも。人の形をととのえたわ
が子を殺そうなんて親が何処にいるでしょう
か」

母親を解放すると、そのまま父王の牢へ走
った。

牢内の毘婆王は飢えと疲労で眼もかすんで
いた。その耳に走ってくる足音が聞こえた。

「阿闍世だな」

長い幽閉生活で足音の主を正確に聞き分け
ることができた。

「いよいよ来たな。殺しに来たな」

毘婆王はかねて外ずしておいた窓格子、そ
こへよじ登ると戸外へ身をおどらせて果て
た。阿闍世王が最後に気づいた人倫の道もみ
のらなかった。

(くぐく)

|| 好評 ||

竹中信常著

『仏教への問いかけ』

B 6判函入 二七五頁 定価 三五〇〇円 (千二百五〇円)

〔普及版〕B 6判二三五頁 定価二八〇〇円

○仏教の生活信仰を、宗教学の学問的蓄積とそ
の真摯な実践体験を通して、改めて問いかけ、
語りかけようとする――

△発売▽

山喜房仏書林

〒113 東京都文京区本郷五―二八―四

振替 東京〇―一九〇〇

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五十巻 十月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和五十九年九月二十五日 印刷
昭和五十九年十月 一日 発行

編集人 宮林昭彦
発行人 佐藤密雄
印刷所 長谷川印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人顕仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒113 振替東京八―八二―八七番

(新)

(刊)

『浄土宗のおつとめ——日常勤行式——』

著者

大正大学教授・文博

真野龍海

B6判 一〇〇頁 定価六五〇円(〒二五〇円)

[五十部以上二割引定価五二〇円 〒無料]

◎平易にかつ丁寧な解説がほどこされた日常勤行式のお話。日々の信仰生活のおつとめに、全二十三節からなるやさしい解説文がお役に立ちます。著者の真摯な人生論としても、また広くおすすめしたい好著です。

(発売) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会

電話(〇三) 二六二―五九四四

振替(東京) 八一八二一八七

第五十巻

十月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和五十九年九月二十五日印刷 昭和五十九年十月一日発行